Architectural Institute of Japan

日本建築学会計画系論文集　第502号，117-123，1997年12月
J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 502, 117-123, Dec., 1997

環境の文化特性に関する考察

環境の〈詩性〉に関する研究　その1

A CONSIDERATION ON CULTURAL FACTOR OF ENVIRONMENT

Study on poetic-imagery of environment　Part 1

高木清江*，瀬尾文彰**，松本直司***
Kiyoe TAKAGI, Fumiaki SEO and Naoji MATSUMOTO

The condition of a high-quality environment is showed by a cultural factor which consists of four elements: place, history, climate and poetic-imagery. In poetic-imagery, not only is comfort given, but delight and pleasure as well. Poetic-imagery means a special and environmental element which gives rise to a strong impression and activation of consciousness. It is thought that poetic-imagery is obtained by making the best use of place, history, and climate. In order to create an ideal urban environment, it is necessary to find the way to realize the environment of poetic-imagery.

Keywords : *Environment, Cultural factor, Place, History, Climate, Poetic-imagery*
環境，文化特性，<場所性>，<歴史性>，<風土性>，<詩性>

1．はじめに

従来，地方の諸地域は，地方都市を中心として独自の歴史，風土，文化を育んできた。生まれ育った町で一生を過ごす人も少なくなく，その様な人がその土地を大切にし，地域の特質を守っていた。戦災によって個性を具えた多くの都市が焼け野原となり，様々な特質を失い，歴史的建造物や古くからの町並みが破壊された。

その後の我が国の歴史は驚異的な復興の歴史である。都市は新たに整備された。しかし，それは，科学技術の高度化，情報の氾濫，社会機構の多様化・複雑化などを背景に，地域独自の歴史や風土や文化を無視した力づくの計画や開発のきらいがあった。これにより，都市は個性をなくし，どの都市も同じような機能や形態を持つようになり，都市の拡張が急速に進行するにつれ，市街地はどこでも同じ様な特徴のない街となった。どの都市に行ってもよく似た駅前があり，そのまわりにはこれといって個性のない町並みが広がっている。

一方，生活の中にアメニティという言葉があふれ，人々は快適で穏やかな生活を求める傾向にある。しかし，快適さだけでは人々の生活が充分に満足のいくものにならないという側面もある。生活の中には穏やかな時と共に，ハッと驚くような瞬間，喜びの時間などというメリハリが必要だと思われる。まちづくり事業などにおいて，形だけにこだわり，統一され，整然としただけの空間は，綺麗だけれども退屈であるという意見がある。それは，統一の裏には，画一的，均質的という問題があるためでもある。

本研究は，アメニティを越えた，よりダイナミックな生活環境の構造を明らかにし，生活[注1)]に喜びと活気をもたらす環境の実現に資するために，〈詩性〉の概念を中心とする環境理論ならびに計画手法の構築を図る。本論では，環境の文化特性という考え方を提起し，特にそのうちの〈詩性〉について基本的な考察を行う。

なお，本論での環境は，環境工学のような狭義の環境でもなく，自然環境・地球環境などの環境でもなく，建築計画や都市計画の対象とされる建築・都市・地域の空間環境を意味している。これを単に空間と言わないのは，様々の生物が共存する生態学的環境のように，多様な主体の共存する場として建築・都市・地域を捉えるからである。

2．環境の文化特性

2－1環境の現状

元来，文化は，土地の歴史や風土などから人々が作り上げていくものである。田舎には田舎ならではの地域に則した慣習や約束事があり，都市には都市の洗練された文化があり，それらの違いが様々

* 名古屋工業大学大学院社会開発工学科専攻　大学院生・修士(工学)　Graduate Student, Dept. of Architecture, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.
** 大同工業大学工学部建設工学科　教授・工博　Prof., Dept. of Construction, Faculty of Engineering, Daido Institute of Technology, Dr. Eng.
*** 名古屋工業大学工学部社会開発工学科　教授・工博　Prof., Dept. of Architecture, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

の仕方で環境の上にも反映していたことが，かつての落ち着きある文化の時代における環境の姿であった。環境もやはり，人々の精神的な価値と，それを生み育てた歴史や風土との間に深い関わりを備えていた。

今日では，環境は，これまで培ってきた多様性と精神性を失っている。それを，抽象性と通俗性の拡大として捉えることが可能である。

抽象的環境の歴史はここ100年ぐらいのことと言える。レルフは「場所の現象学」[1]の中でこのように書いている。「工業化以前の社会やわざとらしさのない手工業文化の特徴であった場所と景観の地方色や多様性はしだいに消えつつあり，あるいは消滅してしまったのではないかという感傷をいたるところで耳にする。それらに代わって，私たちはノルベルク＝シュルツがいみじくも言った平板な景観『フラットスケープ』を作り出そうとしているのであり，それは意志の深みを欠いたありふれた月並の経験の可能性しか与えてくれない。」[1]また，ムーアは次のように記している。「世界中の豊かな多様性をもつ場所は…単調で混乱した建築群の意味を欠いたパターンの下に急速に塗りこめられようとしている。」[1]

抽象性から脱して意味のある環境を求めようとするとき，意味のレベルが通俗性に走るというもう一つの傾向が現代にはある。この傾向は，ハウスメーカーの住宅商品を見るならば顕著である。多様性，個性をうたい文句にしたそれら住宅商品をいとも簡単に受け入れているというのが，今日いわれるところの個性の時代，多様化の時代の実態である。また，1980年代以降，町づくりが盛んとなり，文化行政という言葉も生まれ，地方色を生かした個性的な環境を生み出そうとする試みがなされているが，抽象を超えるためのそのイメージ化のまちづくりが，表面を飾るだけの通俗に陥っている場合も少なくない。

２－２文化特性とは

環境が抽象と通俗に陥ることなく，文化の香り高い個性的な環境たり得るための条件を，環境の文化特性と呼ぶことにする。本論では，文化特性を〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉〈詩性〉の４つで捉えることとした。これを設定するに先立って，幾つかの文献の記述を分析している。すなわち，シュルツなどによる幅広い視点からの環境や空間に関する書籍[注2]の中で，質的な達成を支える要因としてどの様な特質が捉えられているのかを整理・分析した。それらの分析に基づき，筆者らの独自の考察をも加えて，上記４つの特性は抽出された。分析の概要を以下に示す。

ハイデッガーの示している“場所”には，人が慣れ親しむ馴染みの場所と人間の根底にある実存的空間の意味合いが込められている。[注3]分析の対象とした著者らはいずれもハイデッガーの現象学的場所論の影響下にあると言えるが，それぞれにニュアンスの違いがある。

シュルツは場所を実存的空間として捉える傾向にあり，トゥアン，リンチ，レルフは馴染みの場所として捉える傾向にある。[注4]文化特性の観点からわれわれが取り上げるべき場所は，馴染みの場所というよりは実存的空間としての場所だといえる。リンチの著書においては，馴染みの場所は印象深く記憶に残り易い場所である場合が多いため，個々の場所の記述は実存的空間の事例として扱えるものが多い。[注5]場所の構造要素としては，シュルツによって，物質的な実体，形状，テクスチャア，色彩などがあげられている。また，場所の構造の基本的特性は集中化と囲い込みであるとも述べられている。[2]

場所の印象について，風土に基づくもの[注6]，歴史に基づくもの[注7]の事例が，シュルツ，リンチ，トゥアン，レルフのいずれの著書にも少なからず記載が見られる。

さらに，感動や強烈な印象を与える場所が存在することも記されている。[注8]通常の印象を一段も二段も飛びこえる強い影響を意識にもたらす場合である。

これらの分析を通して，先ず明白なことは，環境の文化特性としての場所性の重要性である。しかし，いずれの著書においても，場所性のもたらす印象の中に，風土的なもの，歴史的なもの，さらにもっと一般的な印象，そして感動に類する強い強い印象，等のすべてをひっくるめたかたちで場所性を論じていて，その間の整理がない。

本論では〈場所性〉を，諸文献における場所性のうち，風土的なもの，歴史的なものを除いた，空間的性格の強い部分のみを指すものとして捉え直した。風土と歴史を別に扱うのは，これらが環境の固有性を支える特別な要因であり，個々にきちっと扱っていくことの意義は大きいと考えられるからである。さらに，高度な場所体験としての，詩的な印象深さの部分をも独立の要因として分化した。

４つの文化特性は，いずれもイメージのレベルにおける価値であり，〈歴史性〉にしても歴史的事実そのものを言うのではないし，〈風土性〉はその物理的現象を言うのではない。〈場所性〉もやはりイメージである。〈詩性〉は詩的イメージである。

イメージの構造を理解しようとするとき，これを整理する分類軸には様々あり，刺激種別による視覚イメージ，聴覚イメージ等もその一つと考えられるし，外的刺激のあるなしによる，知覚的イメージ，想像的イメージ等もその一つであると考えられる。[注9]また，イメージの感じ方の深さについて，シュルツやスティーヴンズらが，２つのイメージレベル（先天的なものと後天的なもの）が存在するとしているのもその一つと言える。[注10]本論において提起する４つの特性については，環境の文化的質的向上という我々の目的に適したかたちでの，新しいイメージ分類を示しているのだという言い方も可能だと思われる。

図１に〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉〈詩性〉の関係を図示する。

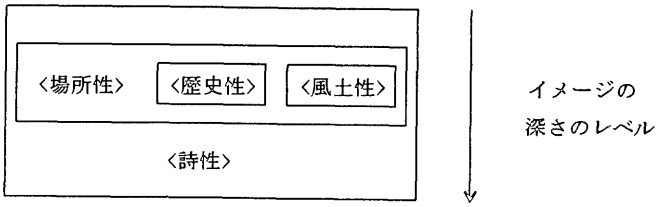

図１　文化特性関係図

以下に，４つの文化特性について説明する。

２－３〈場所性〉

既述のように場所という言葉は，著者によって捉え方の違いがあり[注11]，しかも包括的に捉えられているため曖昧になりがちである。ここでは場所を『一定の雰囲気を有する空間的なまとまり』と定義し，環境においてこのようなイメージ特性が認められるとき，その

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

特性を〈場所性〉と呼ぶ。環境を一つの“物語”にたとえるなら，場所は物語を構成するセンテンスやパラグラフに相当する。〈場所性〉はセンテンスやパラグラフの意味的な内容である。これによって環境にまとまりの感覚が生じる。その意味で，〈場所性〉は，環境に性格をもたらすための基本的な特性だといえる。

場所は構造を有する。場所の構成要素は，〈空間形式〉と〈図像形式〉である[注12]が，それに属する１つ１つが結合しあって様々な組み合わせをとる。そして，それらの関係によってイメージはさまざまな形で生起する。〈空間形式〉には，囲い，覆い，中心，門等があり，遮蔽，庇護，求心，方向等の空間イメージをもたらす。〈図像形式〉は，特定の意味，雰囲気，イメージをもたらす可能性として形・色[注13]のパターンに組み上げられた視覚的形式をいい，イメージの単位に対応する物的な単位を構成している。

〈歴史性〉〈風土性〉〈詩性〉が場所を形成するための支配的なイメージとなっている場合も有り得る。しかし通常は，それ以外の一般的なイメージによって〈場所性〉は成立している。

「石畳の通りは，溝のように細長く，石としっくいの黄味がかった灰色の高い建物には，よろい戸や鉄格子，そして洞穴のような玄関やフローレンス独特の深い廂などがつきものである。」[3]リンチによるこの記述は，溝のように細長い〈空間〉の閉鎖性と伸展性によって場所のまとまりが成立しており，石畳や黄味がかった灰色の高い建物，よろい戸や鉄格子などの〈図像〉によって雰囲気が傾向づけられている〈場所性〉の例である。[注14]

２－４〈歴史性〉

〈歴史性〉とは，『環境要因が，歴史的な物語，人々の記憶や思い出，時間的な蓄積等を通じて，環境に対して独特のイメージ特性を及ぼす場合の，その特性』である。

イメージ的に歴史を垣間見るのであって，なんとなく古さや伝統を感じるといった種類のイメージとは異なる。〈歴史性〉には知識が先立ち，歴史的知識があるために，ある物質要素の知覚をきっかけに，昔へ思いを馳せることができるのである。〈歴史性〉のイメージを導くきっかけとなる要素として，場所，建物，石碑，地名，その他が考えられる。

トゥアンの著書[4]には物理学者のニールス・ボーアがヴェルナー・ハイゼンベルクとともにデンマークのクロンボー城を訪れたときに，ボーアがハイゼンベルクに語った言葉がある。「ここにはハムレットが住んでいたのだと考えただけで，たちまち，この城がそれまでとは変わって見えてくるのはおかしなことだと思いませんか。私たちは，科学者として，城というものは石材だけでできていると信じていて，…（中略）…ハムレットがここに住んでいたという事実によってどこも変わるはずはないのに，しかし，城は完全に変わってしまうのです。突然に，城壁と塁壁はまったく別の言葉を話し始めます。城の中庭は一つの世界になり，薄暗い場所は私たちに人間の魂のなかにある暗黒を思い起こさせ，ハムレットの『生か，死か』という声が聞えてきます。…（中略）…シェイクスピアがハムレットに問わせた疑問も，ハムレットを通して明らかにした人間の暗部も，またハムレット自身も，舞台となるべき場をどこかに，つまり，ここクロンボー城に見つけてもらわなければならなかったのです。そして，ひとたびそのことを知ると，私たちにとってクロンボーはまったく違った城になってしまうのです。」[4]

〈歴史性〉は，人々の生活の上につちかわれてきた集団の記憶や物語と深く関わっている。それを生かして，独自性を失った環境の現状を改善していくことができると考えられる。歴史は環境に固有であるため，〈歴史性〉は本質的に環境の個性につながるからである。[注15]

２－５〈風土性〉

〈風土性〉とは，『土地の気候，気象，地質，地味，地形，景観などが環境に対して独特のイメージ特性を及ぼす場合の，その特性』である。

例えば，シュルツの「ゲニウス・ロキ」[2]に，「ハルトゥームを訪れる人びとは，その強力な場所の特質によって直ちに心に衝撃を受ける。不毛な砂漠の国が水平にひろがり，生命を与える大いなる河ナイルがゆったりと流れ，それに巨大な天空と灼熱の太陽が加わり，これらが組み合わさって他に類を見ない強烈な環境をつくり出している。」[2]と記されているのは強烈なる〈風土性〉の例である。シュルツはさらに次のような例をも記す。「ノルウェーの森林では，土地は微細な小山と植物の群生が覆う。その土地は開かれていなくて自由ではないが，微細な『丘』のあいだをちっぽけな『渓谷』が切り通してゆく。ある種のミクロな景観が形成され，それは地の神ノウムあるいは小人ドゥワーフのためにつくられているように思えるのである。これとはことなって北フランスでは，表面の起伏はひろがってはいるが低く波打つ丘陵から成り，その超・人間的スケールは無辺の『宇宙的』ひろがりの感情を生み出す。」[2]

２－６〈詩性〉

快適で穏やかな生活が人々にとって重要である。一方，いわゆる快適さだけでは人々の生活が充分に満足のいくものにならないという側面もある。

平成元年の国民生活白書に，山梨県が生活指数の日本一になったことが記されている。東京の生活指数は上位10県にも入っていない。この結果について，県民の若者層は「山梨が東京にかなうわけがない」とシラケていると新聞[5]は報じていた。東京のもつ刺激に満ちた魅力を捉えてのことである。[注16]

このようなことを考えると，人は快適性を求めながらも，それ以上の環境を望む気持ちをも抱いているように思われる。そのような欲求の対象とされる環境の刺激的魅力的な側面を〈詩性〉という言葉で捉えることとし，次のように定義する。すなわち，〈詩性〉とは，『刺激や思いがけなさを通じて，強い印象や感動をもたらし，意識に活性をもたらす環境のイメージ的な特性』である。

〈詩性〉という考え方は，現状において皆無ということではないが，従来は〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉と混然とされてしまうことが多く，独立の概念としてはっきり定義されることはなかった。

３．〈詩性〉についての考察

３－１〈詩性〉の原理

〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉も心にしみるイメージ的な効果である。それと〈詩性〉の効果はどのように違うのか。

バシュラールは次のように書いている。

「詩人がわたくしに，

　　ぼくはパイナップルの匂いの悲しみをしっている

と，いうとき，わたくしの悲しみがやわらぎ，もっと甘美な悲しみ

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

にかわる。」[6]

詩の喜びは通常の情念（悲しみ，等）とは違うものである。そして，バシュラールは，詩的イメージについて次のように記す。「われわれが詩的イメージの存在の真の尺度をみいだすことができるとおもうのは，しばしば因果性を裏がえしたところであり，またミンコフスキーによってきわめて精密に研究された『反響』のなかなのである。この『反響』において，詩的イメージは存在の響きをもつことになるだろう。」[6]「イメージの存在を決定するには，われわれは，ミンコフスキーの現象学の流儀にならって，その『反響』を経験しなければならないだろう。」[6]

ちなみに，ミンコフスキーは，精神が活気づき生気に溢れる力動的，生命的な現象に関して次のように述べている。「生命そのものが…（中略）…その存在の奥底まで反響し，そのなかに浸透し，波と一緒になって振動し，波全体と一つになりつつ波の生命を生きるだろう。これこそ『反響する』現象の本質そのものであろう。」[7]これによって，〈詩性〉のもたらす心的効果の特徴がいかんなく表現されていると思われる。

このような〈詩性〉の効果を生み出す環境のメカニズムについては，当面，明確なことは何も言えない。しかし，若干の推測は可能である。

先ず，〈詩性〉は〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉を素材とし，その組み合わせや構造化の妙から生じると考えられる。

次いで，〈詩性〉の環境は，文化の約束事や慣習からの逸脱として成立していると考えられる。多くの場合，周辺と対立したもの，複数の要素が絡みあったもの，これまで知覚したことのないようなものといった性格を持つとも考えられる。これに関連して，バシュラールは言っている。「詩の行為・不意をつくイメージ，想像力における存在のもえあがる焔」[6]と。また，シュルツによれば，「芸術の根本的機能は生活・世界の対立性と多様性を集め来たらすことだと理解することができるのである」[2]。通常見慣れた物でも，違う角度からの知覚は，時に心に鮮明に映る場合もあるであろう。ともあれ，〈詩性〉のメカニズムは，今後の重要な研究課題の一つだと言える。

３－２〈詩性〉の事例

（１）都市の〈詩性〉の事例

リンチは次のように記している。「フローレンスは非常に個性の強い都市であり，その個性にはたくさんの人々が深く心をとらえられている。はじめてこの都市を訪れる外国人の多くは，冷たいとか近づきがたいといった感じを抱くものだが，その特別な強烈さについては否定できないのである。…」[3]

また，シュルツはプラハについて次のように述べている。「プラハほどわれわれを魅惑し惹きつけてやまない場所は少ない。他にもっと壮大で，もっと魅力的であり，あるいはまたもっと『美しい』都市があると言う人がいるかも知れない。しかしプラハには，他のどんな場所にもほとんどないほど旅する人の心に残り，その人を虜にしてやまないものがある。」[2]

（２）街の〈詩性〉の事例

リンチは述べている。「ニューハンプシャーNew Hampshire州のサンドウィッチSandwich…（中略）…ここではホワイトWhite連山がメリマックMerrimac川とピスカタカPiscataqua川の滔々たる上流に落ちこんでいる。植林された山の壁は，その下になだらかに起伏し半ば耕作されている田野と非常に対照的である。…（中略）…つまりその山々のふもとにある平坦な台地は開墾し尽くされていて，何か特殊な『場所』という不思議な強烈な感じを与える。それはまさにフローレンスのような都市の中の強い性格を持つ場所から受ける感じに匹敵するものである。低地の部分がすべて耕作のために開墾されていた頃には，この風景全体がこのような特質をもっていたに違いない。」[3]

カレンの提示する事例では，「南フランスの山岳都市のひとつを訪れたとする。つづら折りの山道を息を切らせて登っていくと，頂上の尾根を走る小さな村の通りにたどり着く。喉のかわきを覚え，近くのレストランにはいる。飲物がベランダのあなたのテーブルに運ばれてくる。一服したあなたはベランダのはずれまで足を運び，そのベランダが1000フィートの絶壁の上に張り出していることを知って壮快な気分になるだろう。または，恐怖を感じるだろう。封入（村の通り）と顕現（張り出したベランダ）を対比的に用いることによって，高さがドラマティックに演出され，真に迫ってくる。」[8]

同じくカレンは，建物の配置構成によっても街は私たちに〈詩性〉のイメージを与えてくれることを記している。「まっすぐな屋根の線，平坦な壁，単調な窓割り―これらに囲まれた街路を歩いていると，私たちの視線は複雑にからみあった不思議な物体に吸いよせられ，その虜になる。それは視覚的な謎のようなものだ。セントノーツの街灯とサマセットにある鹿のつのの椅子は，ハイキングから一週間もたって上着にかぎ裂きをみつけたときのように，思い出に残る印象を与える。」[8]

（３）建築の〈詩性〉の事例

ベンチューリーは次のように述べている。「ル・コルビュジエ設計のガルシェの家では，主入口とわきの入口のスケールが対比されている。この対比が非常に新鮮なものに感じられるのは，ふたつの入口が隣り合っているからではなく，そもそも対称なファサードにおいて，それらが同等の位置を与えられているからである。」[9]「コルビュジエのアーメダバードの建物は，現代建築においては稀れな対立性を表現している。この建物には南側から近づいて行くのが正式だが，するとブリーズ・ソレイユの繰り返しパターンが目に入る。しかし，そのリズムは入口部分の吹抜，斜路，階段によって乱暴に切断されている。階段と斜路はそれぞれ斜めの線で構成されているが，それらを，直方体の内側を水平の床で区切ったかたちをしている建物本体との関連で考えると，横から見た時には隣接が，正面から見た時には脈絡なしの隣接が生じている。また斜めの線と垂直線を併置した結果，対立する方向性が生じている。斜路と階段が隣り合わせに並置されていることの唐突さは，例外的に大きな吹放ち空間と，ファサード上その部分のリズムを少し違えることで，僅かながら緩和されている。しかし遠目に眺めた時に感じられるこれらの対立性は，建物に近づいて行き，内部に入って行くと，さらに一層豊かなものに感じられてくる。」[9]

リシツキーの「三色に変わる展覧会場の壁」は，立つ位置によって壁の色が変わるように見える。デュシャンの「ラリー街11番街のドア」は，アトリエの一角に寝室と浴室の入り口が隣り合っていて，その頂点に蝶番を持つ形でドアが設けられている。従って，寝室を

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

あければ浴室は閉ざされ，浴室を開ければ寝室を閉ざす。この扉は閉じているのか，開いているのか。これらを含む沢山の建築における詩的効果の事例を，瀬尾の著書[10]は提供している。

３－３快適性と〈詩性〉

〈詩性〉を考える上には，快適との関係を明確にすることが必要だと思われる。〈詩性〉の経験は，心にとって良い状態の一つであり，その意味では快適性と類縁的であると言える。しかし，既述のように，通常の快適とは体験の深さのレベルが異なるであろう。

「快適性の構造に関する基礎的研究」[11]によれば，快適のレベルを４つに分けることが出来る。[注17]〈快適レベル１〉〈快適レベル２〉は生命機能維持のための快であり，〈快適レベル３〉〈快適レベル４〉は精神的な快である。動物にとっての快適はレベル１及び２の段階にとどまる。レベル１は不快のない平衡安定の状態であり，レベル２は快がホメオスタシスにおける報酬としてもたらされるレベルである。[注18]人間においても，当然そうした一面はある。むしろ，従来の快適性は，これらのレベルを意味する場合が多かったのではないかとさえ思われる。イギリスにおいてアメニティという言葉が生まれたのは，生活していく上での悪条件を改善していくためであった。生命を危うくする不快から脱して，安定を達成することが狙いであった。アメニティが我が国では快適と訳された経緯からして，静かに落ち着いた状態が快適とされる一面があり，平衡安定の〈快適レベル１〉を指す場合も少なくない。一方，疲労時の休息の椅子が快適に感じられるのはホメオスタシスの原理によるものであり，〈快適レベル２〉に相当していると言える。そうしたことは生きていく上に勿論重要なことである。しかし，人間には，生きていくためには役に立たないものまでを執拗に求める傾向が一方にはある。それは，精神的な満足ゆえに，快のための快を欲する人間に独特の一面である。

精神的な快を前掲文献では悦楽・快楽と呼んでいる。レベル３がそれに相当する。しかし，精神的な快にも，精神を活性化するタイプの快の対極に，それをむしろ破壊するタイプの快がある。レベル４がこれに対応している。破壊型の快は過激な消費や刺激の強い娯楽などからもたらされる場合が多い。こうして見てくると，〈詩性〉の効果は，快適理論の中では，精神的な充実としての快へとつながる効果であると理解される。快適性の研究と相たずさえることによって，〈詩性〉研究の発展が期待される。

３－４〈詩性〉研究の今日的意義

抽象化と通俗化の唯中にある今日の環境を，真に人々のものとしてその手に取り戻すために，地域の固有性であるところの〈歴史性〉〈風土性〉の役割は大きいであろう。これによって，消費社会が生み出したまがいものの個性とは違う，本当の意味での環境の個性と多様性の回復が図れると期待することが出来る。

しかし，それが新しい文化の形へといかんなく醸成を遂げるためには，もう一つ必要な条件があるようにも感じられる。ハイデッガー風に言うなら，人は本来，詩的に生きることによって初めて幸いを感じる生き物であり，いかなる価値も，しみじみとその実存の底に滲みわたることによってのみ，共通の思いとして，あるいは共通の資産として，地域のうちに揺るぎなく根付くことが出来るのではないか。したがって，これからの環境は，〈歴史性〉と〈風土性〉を重視しつつ，〈詩性〉のレベルにまで〈場所性〉の質を深めること，高度に過ぎると思われるかもしれないが，このことを目標に据えるのが望ましい。

単に望ましいだけでなく，是非必要なことだとさえ思われる。なぜなら，今日という時代は，人間の本来であるはずの“詩的に生きること”から，あまりにかけ離れすぎてしまった時代であり，折しも，そのことへの反省が芽生えつつある時代でもあるからである。

抽象化と通俗化によって曇らされているのは，環境ばかりではなしに，我々の心が現にそうだと言える。

抽象化は効率尊重の世相を見れば明らかだし，通俗化は商業主義やメディアの影響力について考えてみれば明らかであろう。

メディアの影響力について言えば，我々の心はメディアの提供する既成の価値観の枠組みからなかなか自由でいることが出来ない。したがって，本当の感動というものが得難い。現代は感動無き時代だと言われる。

一方，詩的な感情は自分自身の内的な真実に触れる心持ちであると言えるし，自己発見の感覚であると言える。心が自由になる瞬間だとも言える。

刺激の強い娯楽や過激な消費など麻薬的快楽に溢れ，それでいて感動からは遠い時代なればこそ，〈詩性〉を賞揚し，研究することの意義はきわめて大きいと考えられる。

４．まとめ

本論は，環境の文化的な向上を図るための環境理論の構築に向けて，基礎的な考察を試みたものである。

今日は，心や文化が重視される時代であり，これまでとは違う観点から，都市の環境改善が必要であるとされている。これからの環境改善に必要な特性を環境の文化特性と呼び，〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉〈詩性〉の４つの観点から捉えることを提案した。それぞれの意味合いをさらに明確にすることにより，環境研究への有効な枠組みが得られると思われる。

文化特性の中で，〈詩性〉が，環境の文化的な向上を図る上に最も重要な特性であることを示した。場所の個性や歴史を生かしつつ，詩的環境を作り上げていくことが重要である。そのため，〈詩性〉についてはやや詳しく考察を加えた。

本研究の今後の展開としては，〈詩性〉の実現手法を探ることが，主たる進むべき方向となる。

注）

１）ここでの「生活」の意味は暮らしや日常生活などに必ずしも限られるものではなく，＜観念世界＞と対比される意味での＜生活世界＞－具体的で直接的な体験世界－を指している。また，どのような立場の人であれ，「生活」の張りは必要であり，それぞれの立場に応じた「喜びと活気」のありようが，それぞれに異なりながらも存在すると考えられる。

２）用いた文献は現象学の観点から包括的に環境や空間を扱ったもので，１）～４）の文献を主たる分析の対象とした。
西欧の文献への片寄り等に関しては以下のように考えている。
（１）環境の文化的特質のうちに普遍的な枠組みを見出そうとする考察であり，文化的内容を目的とする考察ではないので，文化的シェマが必ずしも制約とはならない。したがって，検討テキストが西欧の著者に片寄っていることは大きな障害とはならない。
（２）事実，日本人たる筆者らにも４つの文化特性に不自然観は感じられず，同時にこれらを西欧のテキスト内においても読み取ることが出来たため，この考え方は東西文化に関係なく普遍性のあるものだと判断された。
（３）こうした考察方法はやや主観的すぎる印象を与えるかもしれないが，用いたテキストは現象学的な考察書であり，筆者らも国内の状況を踏まえつつ同じ観点からこれらテキストに当たっている。主観的な印象

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

は現象学的アプローチの特色だとも言える。そこには欠点もあるが，その代償として，片寄りの少ない広い視野から文化特性に関する考察が行えるという利点がある。

3）ハイデッガーは「人間の場所にたいする本質的な関係，及びそれを通した空間との本質的関係は住まうことにある」[12]「住まうことの基本的性格は，助けられ保護されてあることである。」[12]として，人間にとっての親しみという性格を場所に与え，また一方，「詩が最初に人間を大地へもたらし，大地に人間を帰属させ，そのようにして人間を住まうことへ連れてくるのである。」[13]のように，詩的に住まうという人間の実存的本質と場所との関連をも示している。

4）シュルツはを次のように述べている。「人間が空間について興味をもつということは，実存に根ざしている。それは，人間が環境の中に生きた関係をつかみ取り，出来事や行為の世界に意味や秩序をもち込もうとする要求から生ずるのである。人間が『対象』に向かって定位するのは基本的なことである。」[14]「認識的空間とは別に，心理学的次元の中に，直接的な知覚的空間と，それよりも安定した空間シェマを区別しなければならない。後者の空間シェマは，いうまでもなくある種の個人的特異性のほかに，普遍的な原初的構造（祖型），社会的文化的に条件づけられる構造というような，ある一定の不変性をもつ要素から成り立っている。それらが一緒になって，人間が環境についてもつ『イメージ』，つまり，意味作用をもつ対象相互間に三次元的関係の安定した体系をつくりあげるのである。」[14]一方，トゥアンらには次のような記述がある。「たとえば，われわれは町の見知らぬ地域にいて，眼の前には未知の空間が広がっているとしよう。やがて，われわれは二，三のランドマークと，それらを結ぶ道を知るようになる。その結果，見知らぬ町，未知の空間と思えたものが馴染みのある場所になる。未知という意味しかもっていなかった抽象的な空間が，意味に満たされた具体的な空間になるのである。」[4]（トゥアン）

「市民はだれでも，自分の住む都市のどこかの部分に長い間親しんでいて，彼らの抱くイメージは記憶と意味づけに満たされている。」[3]「…環境が見てわかりやすいように組み立てられ，鋭いアイデンティティidentityを持つものである場合には，市民はそれにかれらなりの意味や連想を吹き込むこともできるのである。環境はそうなってこそはじめて，すぐれた，まぎれのない，真の場所となることであろう。」[3]（リンチ）

「場所は人間の秩序と自然の秩序との融合体であり，私たちが直接経験する世界の意義深い中心である。それは，固有の位置や景観や人間集団によってというよりも，特定の状況の上に経験と意志とが焦点を結ぶことによって生まれる。場所は抽象的な物や概念ではなく，生きられる世界の直接に経験された現象であり，それゆえ意味やリアルな物体や進行しつつある活動で満たされている。」[1]（レルフ）

5）リンチの「都市のイメージ」[3]に記されている印象に残る場所の例である。「ロサンゼルスのパーシング・スクエアは…（中略）…この広場はおそらく同市のイメージの中で最も鮮明なところであり，非常に独特な空間とか造園とか活動などによって特徴づけられていた。」[3]「ビーコン・ヒルにあるルイスバーグ・スクエア…（中略）…よく知られた静かな住宅地の広場で，いかにもビーコン・ヒルらしい上流階級のテーマの香りがただよっており，柵で囲まれた公園が非常に目立つ存在となっている。」[3]「コプリー・スクエア，ルイスバーグ・スクエア，オルベラ・ストリートなどといったノードは，２，３フィート足を踏み入れるだけでそこに入ったことがわかるほど，はっきりした境界線をもっていた。」[3]「サン・マルコ広場は非常にきわだっていて，華美かつ複雑であり，ヴェニス市の全般的な性格および隣接している狭い曲がりくねった空間と著しい対照をなしている。だがそれでいて，ヴェニス市の呼びものである大運河とは密接に結びついている。」[3]

6）シュルツの「ゲニウス・ロキ」[2]には次のような例がある。「ハルトゥームを訪れる人びとは，その強力な場所の特質によって直ちに心に衝撃を受ける。不毛な砂漠の国が水平にひろがり，生命を与える大いなる河ナイルがゆったりと流れ，それに巨大な天空と灼熱の太陽が加わり，これらが組み合わさって他に類を見ない強烈な環境をつくり出している。」[2]また，リンチは，「…地形は依然として都市のエレメントを強化するための重要な要素である。くっきりとした丘は地域を明確にするし，河川や海浜は強いエッジとなり，ノードも，地形上のかなめに位置すればさらに強力になるのである。」[3]と記している。レルフは次のようなルネ・デュボスの言葉を紹介している。「『場所の永続性』あるいは場所の外見と精神における連続性というものが存在する。ちょうどどんな人の外見上の個性や特徴も幼少時代から老年期まで持続するように，ある特定の場所のアイデンティティは多くの外的変化を経ても持続することができる。なぜなら，そこには内的な潜在力のようなもの，すなわち『内なる神』があるからだ。」[1]

7）リンチが調査インタビューを行った時の印象として語っている。「『石畳みの』（実際は煉瓦敷きだが）通り，その狭さ，商品，そこで売っている蝋燭や砂糖菓子のにおいにいたるまで，この場所については実にあざやかに描写されていた。この小さな場所は視覚的にとても明瞭であるのみならず，ロサンゼルス市の歴史の真のなごりをとどめている唯一の地点でもあるので人々は猛烈な愛着を覚えているようである。」[3]トゥアンは歴史的なイメージについてこのように記している。「ゲイトウェイ・アーチは，アメリカの歴史を超越した『天空』と『門』という一般的意味をもっているが，同時に，アメリカの歴史のなかの一つの際だった時代，すなわち西部開拓が始まった時代という特定の意味ももっているのである。永続性のある場所というのは世界中にわずかしか存在しないが，これらは人類に話しかけてくる。」[4]また，レルフの著書には「モスクワの赤の広場，ナイアガラの滝，アクロポリス，そのどれもが，時々の流行と政治体制や信条のいくたびの変化を乗りこえて，世間の注目を集め続けてきた。」[1]と記されている。

8）リンチは，「たとえ自然のままのあるいはまとまりのない空間であっても，おそらく楽しさは伴なわないにせよ，強い印象は与えるものである。ボストンのデューウィー・スクエアDewey Squareでおこなわれていた建物の取りこわしと穴掘りの光景を，印象的な眺めだと言う人が多かった。これはきっと，それ以外の都市空間がすき間なく詰まっていることとの対照のためであろう。」[3]トゥアンは強い印象を与える場所があることを次のように述べている。「一目見て女性に恋をするのと同じように，場所に一目惚れすることもある。たとえば，峠から砂漠を一目見たときに，また大森林に一歩足を踏み入れたときに，喜びの気持ちばかりでなく，それまで実は常に知っていた原初的な世界を認識したような感覚が不可解にもわき上がってくることがある。短くても強烈な経験は，過去を無にし，その結果われわれに，約束の地と引き換えにただちに自分の本拠地を捨ててもよいという気持ちにさせる力をもっているのである。」[4]レルフの著書にはこのように記されている。「実体的空間の経験は，ときには圧倒的あるいは強烈なものである。それは，ある角を曲がったときに突然なにかの壮大な眺めに出くわすような場合である。ミラーはこのような経験を次のように表現している。『私の目は突然息をのむような景色に吸い付けられた。密獄同然の所から，私はパリの最も古い街区のひとつを見下ろしていたのである。その眺望は全く隅々まで柔らかく夢を見るようであり，私の目には涙が溢れてきた。』」[1]

9）イメージは，心に思い浮かべる像，すなわち心象であり，外的刺激なしに生起するイメージ（想像心象）と外的刺激に基づくイメージ（知覚心象）がある。〈詩性〉は，既述のように『刺激や思いがけなさを通じて，強い印象や感動をもたらし，意識に活性をもたらす環境のイメージ的な特性』であり，その空間を体験する者に対し瞬時に働きかけるものである。つまり，〈詩性〉は，イメージを与える対象が存在して初めて成り立つ特性であり，知覚心象と言える。松本らは心象風景に関する研究[16]~[19]を実施してきているが，心象風景は心の中にはぐくまれるイメージであるため想像心象であると考えられる。また，心象風景が“～についてのイメージ”であれば，〈詩性〉は“～からのイメージ”である。“～についてのイメージ”は上にも述べたように，心の中に残るイメージであるが，“～からのイメージ”である〈詩性〉は空間を体験したその刹那のイメージであり，その程度によっては，時間経過の後に記憶から消えることもあるはずである。しかし，心象風景として心に残るイメージは，〈詩性〉からのイメージが重要な要因となっていると考えられる。強い感動を受けた場所は心に残る可能性が高いからである。このようなことから，心象風景の研究の延長上に〈詩性〉研究を位置づけることが可能である。

10）シュルツは「実存・空間・建築」[14]の中で「空間シェマは，いうまでもなくある種の個人的特異性のほかに，普遍的な原初的構造（祖型），社会的文化的に条件づけられる構造というような，ある一定の不変性をもつ要素から成り立っている。」[14]と記している。さらに，Ａ．スティーヴンズによれば，「ある現象が人類全体の共通の特徴であることが発見されたならば，それは集合的無意識の元型の表出といえる。そうした普遍的に見られる現象が元型の働きのみによることを証明することは不可能だし，それが文化の伝播の結果にほかならないことを証明することも同様に不可能である。どう考えても両者は絡み合っているからだ。しかし少なくとも，元型によって決定された現象のほうがそうでない現象よりもはるかに伝播しやすいという強い傾向はあるように思われる。母子の絆，順位をめぐる闘争，雌雄の交尾，巣作りといった特徴的行動は，普遍性，連続性，進化上の安定性という３つの決定的な生物学的基準をみたしており，したがって，元型に根ざし，時代・地域の差を超えた，全人類の典型的な心理的経験と典型的な行動パターンは，そこから生まれるのだと考えられる。」[20]以上のことから，イメージには２つのレベルがあると考えられ，シュルツはその２つを，普遍的な原初的構造（祖型）と社会的に条件づけられる構造，スティヴンズは，原型と文化の伝承の結果と述べている。

11）アリストテレスによれば，「物体のある場所はその物体の一部ではなく，場所と物体は分離できるものであるが，場所は『それを囲んでいる境界』によって定義され，『物体が存在するところもしくは論理的に存在し得るとされるところ』である。」[1]ハイデッガーに関しては注３），シュルツ，レルフ，リンチ，トゥアンに関しては注４）参照。

12）高木清江，瀬尾文彰，松本直司：環境の文化特性に関する基礎的考察－環境の詩性に関する研究　その１－．1996年度日本建築学会大会学術講演便概集　建築計画Ｉ　pp673-674　1996.9　を参照。

13）色単体は〈図像形式〉に属するが，〈空間形式〉との関わりで，そこで使用されている色ともども感触的イメージとして扱わなければならない場合もある。例えば，黒く塗られた部屋は白く塗られた部屋より狭く感じることが知られている。

14）カレンの著書[8]には「よく繁った植物，囲い地，建物の間にのぞいている空，やわらかい色調のレンガ－これらは親密さと暖かみに満ちた内面的な生気をかもし出す。そこには明るくはなやかな活気がある。」[8]と書かれている。囲い地は〈空間形式〉を示し，よく繁った植物，建物の間にのぞいている空，やわらかい色調のレンガは〈図像形式〉に属する。

15）まちづくりにおいて歴史に注目されるケースの少くないのはそのことに

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

由来している。しかし，その扱いが表面的で冒頭に述べた「通俗」に陥るケースが少なくない。歴史をまちのイメージに生かすことは当然ながら歴史を再現することと異なるのであり，まちづくりにおいては，その間の事情をよく研究することが重要であろう。

16) 東京の魅力には，麻薬的な魅力と詩的な魅力が混在しているので安易な東京礼讃は避けるべきだが，詩的魅力と無関係ではなく，印象的な事例なので引用した。

17) 「快適性の構造に関する基礎的研究」[11]は快・不快のレベルを６つに分けている。〈不快レベル１〉〈快適レベル１〉〈快適レベル２〉は，生体維持のための快・不快であり，すべての動物に感じられる快・不快である。〈快適レベル３〉〈快適レベル４〉は，精神的な快であると述べられている。〈快適レベル３〉は人間の自由と想像力に関係していることが特徴であると述べられている。神経生理学の面では〈快適レベル２〉と同様に報酬系が刺激される状態だが，生体を安定へと引き戻したり種族維持のための生存戦略的な快適とは違い，精神的な快であることを強調している。〈快適レベル１〉〈快適レベル２〉は，生命を維持するための手段である。動物にとって快はこの段階にとどまるとされる。〈快適レベル３〉は，生理的なホメオスタシスではなく精神的なホメオスタシスを満たすための快であると述べられている。

18) 一般に動物は不快と〈快適レベル２〉の間でホメオスタシス平衡状態としての〈快適レベル１〉をもとめて揺れ動いている。人間にも同じことが言える。例えば，部屋が暑すぎ汗ばむようであれば体内温度に異常をきたし始めているのであり，不快を感じる。窓を開けてその状態が回避され，さわやかな風でも入ってくれれば満ち足りた気持ちになる。これが〈快適レベル２〉である。汗もひいて平常の状態に戻れば〈快適レベル１〉である。不快，〈快適レベル１〉〈快適レベル２〉をホメオスタシス罰系，ホメオスタシス平衡，ホメオスタシス報酬系とも言う。[11]

〈参考文献〉

1) エドワード・レルフ著　高野岳彦，阿部隆，石山美也子共訳：場所の現象学，筑摩書房　1991
2) ノルベルク＝シュルツ著　加藤邦男，田崎祐生共訳：ゲニウス・ロキ，住まいの図書館出版局　1944
3) ケヴィン・リンチ著　丹下健三，富田玲子共訳：都市のイメージ，岩波書店　1968
4) イーフー・トゥアン著　山本浩訳：空間の経験，筑摩書房　1988
5) 日本経済新聞，1991. 11. 28
6) ガストン・バシュラール著　岩村行雄訳：空間の詩学，思想社　1961
7) E，ミンコフスキー著　中村雄二郎，村本小四郎訳：精神のコスモロジーへ，人文書院　1983
8) G・カレン著　北原理雄訳：都市の景観，鹿島出版会　1975
9) R・ヴェンチューリ著　伊藤公文訳：建築の多様性と対立性，鹿島出版会　1982
10) 瀬尾文彰著：詩としての建築，現代企画室　1986
11) 瀬尾文彰，坊垣和明：快適性の構造に関する基礎的研究　日本建築学会計画系論文報告集　第475号，pp75-83，1995. 9
12) Heidegger：Building Dwelling Thinking, in Poetry Lan guage Thought, edited by Albert Hofstadter, New York, 1971
13) Heidegger：, , , Poetically Man Dewells, in Poetry Lang uage Thought, edited by Albert Hofstadter, New York, 1971
14) ノルベルク＝シュルツ著　加藤邦男訳：実存・空間・建築，鹿島出版会　1973
15) 岩永敬造，松本直司：都市の心象風景に関する研究－長野市の心象風景のイメージ構造について－，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 23，pp451-456，1988
16) 岩永敬造，松本直司：長野市中心市街地における心象風景の視覚条件に関する研究，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 25，pp685-690，1990
17) 西村匡達，松本直司，寺西敦敏：都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 27，pp721-726，1992
18) 犬飼佳明，松本直司：心象風景の方向性とその現実の空間形態，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 30，pp205-210，1995
19) 渡辺成博，松本直司，高木清江：心象風景の形成過程と現実の空間形態，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 31，pp175-180，1996
20) アンソニー・スティーヴンズ著　鈴木昌訳：ユング，講談社　1995

(1996年12月10日原稿受理，1997年７月16日採用決定)

NII-Electronic Library Service